

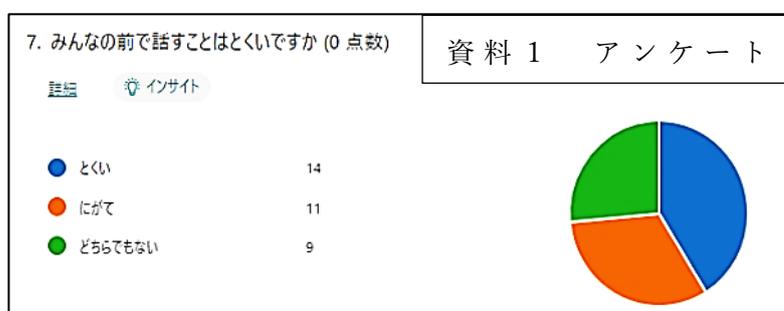
「話の中心を意識し、工夫して伝えることができる児童の育成」
～「話したいな、わたしのこと」の実践を通して～

碧南市立新川小学校 坂田 翔

1 主題設定の理由

本学級3年2組は、活発で話好きな児童が多い。4月の自己紹介では、自分のことを伝えようとたくさんの内容を話していたが、終わりが見えずに時間が足りなくなる児童が何人もいた。内容をまとめることができずに、話が長くなってしまったり、自分で何を話しているかがわからなくなってしまったりする児童が多い。話の中心を意識することが苦手な児童が多いと考えられる。また、「みんなの前で話すのが得意ですか」というアンケート【資料1】では、34人中11人が「苦手」と回答している。

「みんなの前で話すのが苦手なのはなぜですか」というアンケートでは、9人が「恥ずかしいから」や「間違えたら恥ずかしいから」と回答している。このように回答している児童は人前で発表するとき、声が小さくなっていることが多い。



そこで、まとまりごとに文章を作成し、話す順序によって伝わり方が違うということに気づかせたい。伝えたい部分はどこなのかをよく考え、話す順序によって伝わり方が違うということに気づかせることで話の中心を意識し、相手に伝える工夫をしながらスピーチができるようにさせたいと考え、本研究を実践した。

2 研究の構想

(1) 目ざす児童像

話の中心を意識し、相手に伝わるように工夫してスピーチができる児童

(2) 研究の仮説と手だて

[仮説]

スピーチをする内容のまとまりごとに文章を考えることで、話の中心を意識することができるだろう。

[手だて1]

スピーチをする内容を整理することができるように、原稿を作成する際に項目を記入したワークシートを活用することで、文章をまとまりごとに分けて考えられるようにする。

[手だて2]

話の中心を意識してスピーチができるように、項目ごとにまとめた文章をどの順番で話すかを考え、並びかえる時間を設定する。

[手だて3]

聞き手にどのように伝わったのかを確認できるように、グループで発表練習を行い、聞き手が話し手の原稿に気づいたことを記入してフィードバックする時間を設定する。

(3) 単元計画 (9時間完了)

	時	学習内容
つかむ	1	○学習の見通しをもつ ・自慢できることや習い事など、友達に伝えたいことを考えて、発表をすることを考える。
	2 3 4 5	○スピーチの内容を考える ・話題を決め、話したいことと話の中心となることを決める。 ・話したいことを文章にして、話すときに相手に伝わりやすい順番を考える。 ・2つの原稿例を見比べて気づいたことを話し合う。 ・ワークシートをもとに原稿を作成する。
深める	6	○グループでスピーチをし合い、伝わる工夫を考える。 ・グループでスピーチをして、聞き手が気づいたことを話し手の原稿に記入する。
	7	・原稿をもとに伝わりやすい構成を考える。
まとめ	8	○学んだことを生かしてスピーチをし合い、感想を伝え合う。 ・みんなの前でスピーチを行い、感想を伝え合う。
	9	

3 実践

(1) 課題設定について

本研究で身につけたいこととして、「話の中心を理解する」と「伝わりやすい構成を考える」、「自信をもってスピーチをする」、「聞き手を意識してスピーチをする」がある。この4つの力を養うためにはスピーチをする必然性を児童に感じさせる課題設定が必要である。そこで、東京書籍の教科書にある「話したいな、わたしの好きな時間」という教材をモデルに、テーマを好きな時間ではなく、「自分のこと」とした。

本学級では、習い事をしている児童が多く、内容もダンスやBMX、ピアノな

ど多岐にわたっている。そこで、自分が自慢できることや得意なこと、特別に行っていることをテーマとし、それをクラス全員に対してスピーチをするという課題を設定した。

- (2) スピーチをする内容を整理することができるように、文章をまとまりごとに考える活動（手だて1）

児童に、スピーチをするときに一番伝えたいことはなんだろうと発問した際には、「バレエ」や「テニス」といったテーマについて話す児童が多かった。そこで、話の中心を意識してスピーチをするためには、原稿を作成する段階で自分の話の中心を決める必要があると考えた。

ワークシート（資料2）を活用し、「話したいこと」を箇条書きで書いていった。自分の興味関心が高いテーマになっているので、短時間でもスラスラと書くことができた。

箇条書きで記入したもののの中から1つを話の中心にした。その後、「話の中心」、「具体例」、「まとめ」の3つに分けてそれぞれの文章を作成した。文章を分けて作成することで、話の中心を見失わずに原稿の作成ができるのではないかと考えた。また、文章を分けて作成することで長文が苦手な児童も取り組むことができた。

資料2 児童のワークシート

- (3) 話の中心を意識してスピーチができるように、考えた文章をどの順番で話すかを考え、並びかえる活動（手だて2）

話の中心について考える際、聞き手に一番伝わらないといけないう意識をもつことが必要であると考えた。そこで2つの文例を見比べて、一番伝わったところと気持ちがわかる部分に線を引く活動をした。

文例1（資料3）は、

資料3 文例1

（児童が線を引いたもの）

話の中心が「始め」にあり、気持ちの表現は伝わりやすいように工夫されている。文例2（資料4）は、話の中心が「中」にあり、気持ちの表現は工夫をしていない。二つの文例をタブレット端末で使用する Sky Menu Cloud の発表ノートを使用して配付し、文章

資料4 文例2

（児童が線を引いたもの）

げんこう②	始め	中	終わり
	みなさん、本はすきですか。ぼくがすきな時間は、本を読んでいる時間です。	「エルマーのぼうけん」を読んだときは、エルマーといっしょにぼうけんをしているような気分になりました。エルマーがトラに食べられそうになる場面がありました。本を読んでいるいろいろな体けんをした気分になれるからです。物語だけでなく、図かんでも体けんができてます。たとえば「世界の恐竜図鑑」を読んでいると、自分も恐竜たちの時代にタイムスリップした気がして楽しいです。	ぼくにとって、本を読む時間は、とても楽しい時間です。今日も家に帰って本を読むのが楽しみです。

の中で一番伝わったところにはピンク、気持ちがわかる部分は黄色で線を引いた。その後、グループで文例を共有して気づいたことを話し合う活動を行った後、学級全体で意見交流を行った。

話し合いの中で、「原稿1では、ピンクの線を引いたところが同じだった人が多かったけれど、原稿2では線を引いたところがばらばらになっていた」という意見が出た。この意見から、話の中心を伝わりやすくするためには、「始め」に話すときによいのではないかということが学級全体の意見としてまとまった。また、気持ちの表現を工夫することでより内容をイメージしやすくなり、聞き手に伝わるのではないかという意見も出た。話し合いで出た意見をもとに、自分の作成した原稿を見直して順番や気持ちの表現を再考した。

- (4) グループでスピーチ練習を行い、聞き手が発表者の原稿に気づいたことを記入してフィードバックする時間の設定（手だて3）

みんなの前で発表することが苦手という児童が多い実態から小グループでスピーチを行う時間を設定した。また、グループでのスピーチを通して、聞き手がどのように感じたのかをフィードバックする時間を設けた。

資料5 グループ発表の様子

SkyMenuCloud の発表ノート内にあるグループワーク機能を活用して、グループ内で原稿を共有した（資料5）。スピーチを聞きながら聞き手は発表者の原稿に

資料6 グループ発表時の児童の原稿

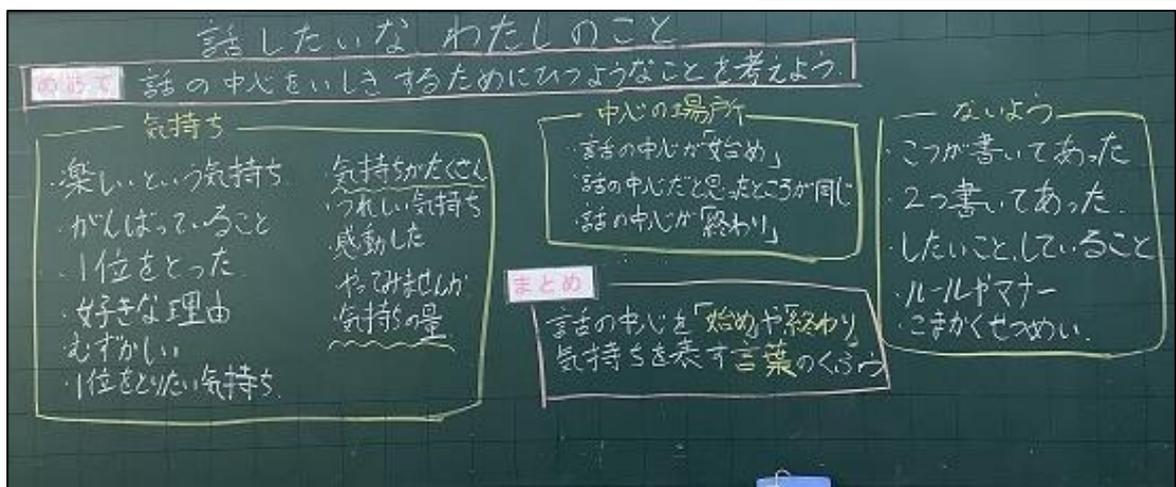
話の中心だと思ふところにピンク、気持ちがわかるところに黄色で線を引いた。一枚の原稿を共有することで、聞き手の意見が同じだと線を引く位置が重なっていくようにした(資料6)。

終わり	中②	中①	始め
<p>思いました。</p> <p>楽しんで、しんけんにとりくめる時間だと、</p> <p>わたしにと、バリエもやている時間はとても</p>	<p>いはいほりでもらいたいと思つたので、かんはでています。</p> <p>それに、ほりでもらつとつれしいので、</p> <p>しっはいしても、ほりでもらえるので、やる気があります。</p> <p>二つ目は、ほりでもらえることです。</p>	<p>気持ちがかすくす、きりします。</p> <p>みんなであとでいると、すくく楽しいので、</p> <p>二つ目は、おとれることです。</p>	<p>みなさんはバリエしていますか、わたしのすきなことは</p> <p>バリエも、いまからバリエのいい所を二つしようか</p> <p>します。</p>

発表が終わり、グループで話し合う時間を設けた。自分が話の中心と思っているところにピンク色の線が引かれている児童は、ちゃんと伝わったということが実感でき、自信をもつことができた。

一方で、自分が設定した話の中心にピンク色の線が引かれていなかった児童は、なぜそこが伝わらなかったのかをグループ内で質問していた。また、グループ内で「この気持ちの表現はわかりやすかったよ」など褒め合う姿が見られた。全体で意見交流を行った際には、話の中心を「終わり」にしても伝わりやすいのではないかという尾括型への気づきもみられた(資料7)。

資料7 第7時の板書



4 成果と課題

[手だて1]

スピーチする内容を整理することができるように、原稿を作成する際に項目を記入したワークシートを活用することで文章をまとまりごとに分けて考えられるようにする。

1学期は、個別で対応をしないと文を書くことができなかつた児童も、短い文であれば自分の力で書くことができるようになった。また、初めに話の中心を決めたことによって、文章を作成する際に自分の伝えたいことが明確になり、自分の原稿の中で「話の中心はどこか」と聞くとすべての児童が答えることができた。また、「具体例」や「まとめ」など文の役割を明確にしたことは、話の中心を意識することに有効であった。

[手だて2]

話の中心を意識してスピーチができるように、考えた文章をどの順番で話すかを考え、並びかえる時間を設定する。

2つの文例を出して、その違いを考える活動を行ったことで、話す順序や表現によって聞き手への伝わり方が違うということを実感することができた。この活動を通して、話す順序の重要性を確認することができた。しかし、自分の文章を並びかえる活動になると書いた順番から変えることがなかなかできない児童もいた。今回はワークシートを用いて手書きで原稿を作成したが、タブレット端末を使えば同じ文章を何度も書くことなく、文章の順番を変えてどのように伝わるかを何度も試行錯誤ができてより効果が期待できる。

[手だて3]

聞き手にどのように伝わったのかを確認することができるように、グループで発表練習を行い、聞き手が発表者の原稿に気づいたことを記入してフィードバックする時間を設定する。

本実践では、3人から4人の班を形成し、発表練習を行った。原稿への書き込みをフィードバックすることで、自分の伝えなかったことと聞き手が感じたことには違いがあることを実感することができた。なぜ違いが生じたのかをグループで話し合うことによって、スピーチの順序や内容、表現について理解や考えを深めることができた。

今回、自分が自慢できることや得意なこと、頑張っていることを学級の仲間に伝えるという設定で実践を行った。

ワークシートを用いて話の内容をまとめりごとに考え、そのまとめりを並び替えることによって、伝わり方の違いを実感することができた。また、その違いや気づきについて意見交流を行うことによって、話の中心を意識し、順序や表現などを工夫して伝えることができる児童を育成することができた。

話す指導については、一朝一夕では成し得ない。朝・帰りの会でのスピーチや学習発表会など、学校生活の中に今回の実践で学んだことや身についたことを活用する場を意図的に設定し、継続的に指導していきたいと考えている。